

## シリア・レバノンのパレスチナ難民キャンプで活動する諸組織(2)(研究資料)

著者	?岡 豊
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	現代の中東
巻	45
ページ	51-62
発行年	2008-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005723">http://hdl.handle.net/2344/00005723</a>

# シリア・レバノンの パレスチナ難民キャンプで活動する諸組織(2)

高岡 豊

はじめに

- I シリア・レバノンのパレスチナ人の概況とパレスチナ難民キャンプで活動する諸組織の類型化
- II シリア・レバノンのパレスチナ難民キャンプで活動する諸組織(世俗主義的イデオロギーを標榜する組織)(以上, 前号)
- III シリア・レバノンのパレスチナ難民キャンプで活動する諸組織(イスラーム主義を標榜する組織)(以下, 本号)
- IV 諸組織の相関と政治同盟の現況  
おわりに

## III シリア・レバノンのパレスチナ難民キャンプで活動する諸組織(イスラーム主義を標榜する組織)

本節では、主に2003年以降にシリア・レバノンで活動歴が確認できた諸組織のうち、イスラーム主義を標榜する組織を取り扱う。本節においては、諸組織を名称(五十音)順に配列し、指導者(可能な場合はシリア・レバノンにおける代表者も付記)、基本政策の要点、2003年以降確認できたシリア・レバノンにおける活動と関連動向を列挙する。

### ・アンサールッラー

Ansār Allāh

1980年代にファタハから分裂したとされる。

アイン・アル=フルワ難民キャンプに在住する組織だが構成員数、基本政策は不明。指導者としてジャマール・スライマーン、ナースィル・イスマーイルの両名の名前が挙げられている。

2003年以降の同組織の関連動向は以下のとおりである。

2005年10月、アイン・アル=フルワ難民キャンプの隣接地でレバノン人と交戦。

2007年6月5日、アイン・アル=フルワ難民キャンプでパレスチナ諸組織が結成した衝突防止部隊に参加。

### ・イスラーム・ジハード

Haraka al-Jihad al-Islāmi

英語名: Islamic Jihad Movement in Palestine  
略称: PIJ

1980年ごろ結成。ムスリム同胞団から分かれて発足し、創設者のファトヒー・シュカーキーはイランのイスラーム革命に影響を受けたとされている[ Sa'adi 1998, 117 ]。在ダマスカス・パレスチナ10派の一つ。構成員数、戦闘員数は不明。指導者はラマダーン・シャッラフ(書記長)、アブー・イマード・リファアーイー(駐レバノンの代表)。

イスラームを、信条、法律、社会秩序と考える。軍事的手段をパレスチナ解放の唯一の手段として採用する。パレスチナをイスラーム、ア

ラブの地であり、「1インチ」(shibr wahid)たりとも割譲できないと考えている。このため、「シオニスト政体」(イスラエル)を無効な存在であるとともに西洋植民地主義の橋頭堡と見なし、どのような形であれ承認しないとの立場をとる。したがって、パレスチナにおけるシオニスト政体の存在を承認したり、ウンマの権利を少しでも譲歩したりする調停は拒絶すべきであると主張する。パレスチナの他のイスラーム運動と民族主義運動との関係については、イスラーム主義、国民主義勢力の統一がシオニスト政体に対するジハード計画の基礎的条件であるとして両者の統合・連携を標榜する。具体的な目標として、パレスチナを完全解放しシオニスト政体を肅清すること、パレスチナの地に公正、自由、平等、シューラー(shūrā, 諮問)を実現するイスラーム統治を樹立すること、ジハードを遂行する義務を果たすためあらゆる手段で可能な限りパレスチナの大衆を動員することを挙げている。また、世界的規模での目標として、シオニスト政体との決戦のためにあらゆる場所でイスラーム大衆を動員すること、パレスチナのためにイスラーム勢力を統一し、世界中のイスラーム・解放勢力と友好関係を結ぶことを目指す。これらの目標を達成するための手段としては、シオニスト標的・権益に対する武装ジハード、コーランとスンナに沿った大衆の組織化を採用するとともに、イスラーム、人民、解放勢力との連携を目指している。そのためには、最新の通信手段や教育、組織、文化、社会、経済、報道、政治、軍事のあらゆる手段を用いる(<http://www.palintefada.com/arabic/sections/articles/print.php?id=161> 2007年5月29日閲覧)。

2003年以降の活動と同組織に関連する動静は以下のとおりである。

2003年10月4日、イスラエル軍がダマスカス近郊アイン・アッ＝サーヒブの施設をPIJの施設であると主張し爆撃。

2005年5月22日、PLOのファールーク・カドゥーミー政治局長がダマスカスでハマースのハーリド・ミシュアル政治局長、PIJのシャッラフ指導者と会談。9月10日、バッシュール・アサド大統領が在ダマスカス・パレスチナ10派の代表と会談。10月28日、「中東和平4者協議」はシリアに対しダマスカスのPIJ事務所の閉鎖を要求。

2006年1月20日、イランのアフマディーネジャード大統領がシリアを訪問、その際在ダマスカス・パレスチナ10派の代表と会談。4月12日、イランのラフサンジャーニー公益評議会議長が、ダマスカスでハマースのミシュアル政治局長、PIJのシャッラフ指導者らパレスチナ諸組織の幹部と会談。同議長は、パレスチナの抵抗運動へのイランの支援継続を強調するとともに、イランが核技術を獲得したことはイスラーム世界を強化すると表明。5月18日、イランのモッタキー外相がダマスカスにてPIJのシャッラフ指導者、ハマースのミシュアル政治局長とおの会の会談。パレスチナ情勢やPAに対する封鎖につき協議。7月12日、イランのラーリジャーニー最高安全保障評議会事務局長が、ハマースのミシュアル政治局長、PIJのシャッラフ指導者、DFLP、PFLP、PFLP-GC、PPSF、PLF、ファタハ・アル＝インティファダ、サーイカの書記長と会談。パレスチナ側は、最新パレスチナ情勢につき説明。7月27日、イランのラーリジャーニー最高安全保障評議会事務局長がハ

マース代表団(ミシュアル政治局長, アブー・マルズーク副政治局長)とPIJ代表団(シャッラフ指導者, ジャード・ナッハーラ副指導者)とおのおのの会談。会談では, 地域情勢とレバノンへの戦争の全般的評価, イランによる停戦努力が議題となり, ラーリジャーニー事務局長はヒズブッラーが戦闘に勝利することへの信頼を表明。10月29日, イランのモッタキー外相が駐シリア・イラン大使館でハマースのミシュアル政治局長とPIJのシャッラフ指導者とおのおのの会談。

2007年5月31日, イランのモッタキー外相がダマスカスでハマースのミシュアル政治局長, PIJのシャッラフ指導者と会談。6月1日, 複数のパレスチナ筋はファタハ・アル=インティファダとPIJの要員がナフル・アル=バーリドキャンプでの戦闘においてファタハ・アル=イスラームに加わっているとの説は根拠のないうわさであると発言。6月20日, ムアッリム外相がシャッラフ指導者等PIJの代表団と会談。7月19日, イランのアフマディーネジャード大統領がダマスカスでPIJのシャッラフ指導者, ハマースのミシュアル政治局長と個別に会談。両組織にPFLPのターヒル政治局員, PFLP-GCのジブリール書記長, DFLPのハワーティマ書記長等その他の諸組織を加えた拡大大会合に出席。9月15日, リファーイー駐レバノン代表らが同国のシニョーラ首相と会談, レバノン在住パレスチナ人問題, ナフル・バーリド難民キャンプの再建問題などにつき協議。10月13日, PIJのナッハーラ副指導者がファトヒー・シュカーキー墓所訪問を主催。PFLP-GCのナージー副書記長, ファタハ・アル=インティファダのアブー・ムサー書記長, アブー・ハージム副書記長, PFLPのターヒル政治局員, 共産党革命派

のアワード書記長等が参加。10月25日, リファーイー駐レバノン代表一行がホッス元首相と会談。10月29日, シリアを訪問したイランのモッタキー外相は, PIJのシャッラフ指導者一行, ハマースのアブー・マルズーク副政治局長一行, 在シリア・パレスチナ諸派指導者一行とおのおのの会談した。会談ではパレスチナの諸問題, 米国が主催する予定の和平会議が議題となり, パレスチナ側はイランに対し支援の継続, イラン側はパレスチナに対し問題を内部で解決することを求めた。

2008年1月4日, ハマースはダマスカスのハイファー・ホールで結成20周年記念演説会を開催。ミシュアル政治局長, シリア・バアス党のアフマド・ハサン民族指導部員, PIJのシャッラフ指導者, PFLP-GCのナージー副書記長らが演説した。1月6日, シャッラフ指導者はシリアを訪問したイランのラーリジャーニー指導者名代(2007年10月20日, ラーリジャーニー氏は最高安全保障評議会事務局長を退任した。以後は, 「ハーメネイ指導者の名代」という肩書きで外交活動を行っている)と会談した。1月23日~25日, ダマスカスでパレスチナ愛国会議が開催された。会議には, ハマースのミシュアル政治局長, 活動家(所属不明)のバッサーム・シャクア, PFLP-GCのジブリール書記長, ナージー副書記長, PIJのシャッラフ指導者, バアス党民族指導部のサーミー・アッターリー, PNF中央指導部のユースフ・ファイサル, バアス党地域指導部のバッサーム・ジャーニビーヤ, ビラール情報相, シャアバーン移民相, PLAのハドラー参謀長, ヒズブッラー幹部のイブラーヒーム・アミン・サイド, ファタハ・アル=インティファダのアブー・ムサー書記長, パレスチ

ナ人民支援のためのイラン委員会の委員長、PPSF、PLF、共産党革命派の代表が出席した。2月15日、イランのモッタキー外相はダマスカスでハマースのミシュアル政治局長、PIJのシャッラフ指導者とおのおの会談した。2月22日、ダマスカスのヤルムークでDFLPは結成39周年中央祝典を開催した。祝典には、ハワーティマ書記長、パレスチナ・バアス党地域指導部のサーミー・キンディール、PFLPのターヒル政治局員、ファタハ・アル=インティファダのアブー・ファーヒル中央委員、PLFのアリー・アジーズ政治局員、PPSFのカーシム・マアトゥーク政治局員、PFLP-GCのアブー・ハサーン、ラフイウ・サアディー両政治局員、共産党革命派のハサン・カラービーラ政治局員、PIJのアブー・ジハード等が出席した。3月10日、シャッラフ指導者はイランを訪問し、同国のアフマディーネジャード大統領、モッタキー外相、ジャリリー最高安全保障評議会事務局長とおのおの会談した。4月1日、ダマスカス南郊のヤルムーク、パレスチナ両キャンプでハマース、PIJ、PFLP-GC、PFLPなどの諸派の呼びかけによる「土地の日」(3月30日)のデモが行われた。

#### ・イスラーム抵抗運動(ハマース)

Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmiya [Ḥamās]

1988年1月16日に声明第1号を発表し、公然活動を開始[ Sa'adi 1998, 170 ]。ムスリム同胞団を母体とする。在ダマスカス・パレスチナ10派の一つ。PLOには加盟していないが、2006年にPLC選挙に参加した。構成員数、戦闘員数は不明。指導者はハーリド・ミシュアル(政治局長)、ウサーマ・ハムダーン(駐レバノン代表)。

イスラームを人間の生活すべてを規定する指

針と考える。パレスチナを審判の日まで分割・放棄できないワクフ(宗教的寄進財)と見なす。この信念に加えて、ハマースがパレスチナ問題の唯一の解決策はジハードであると標榜する点は、イスラエルの「生存権」を容認しない立場の表れであると考えられている。また、ハマースはイスラーム抵抗運動をパレスチナのムスリム同胞団の一部門と位置づけるとともに、それをパレスチナ人の運動であると規定する。すなわち、ハマースはムスリム同胞団の一部としての広域的性質を帯びつつ、民族運動としてのパレスチナの性質を前面に出しているのである。ハマースにとっては、パレスチナのイスラーム性は世俗主義では代替不可能な信仰の一部であり、同組織のイデオロギーをイスラームに基づく民族主義と考えることができる。一方、ハマースはイスラーム抵抗運動を人道的な運動であるとしており、人道上的権利を擁護し、イスラームの寛容さを遵守すると表明する。この原則に沿って、イスラームの下ではすべての宗教が安全に共存できる、女性には子孫の育成・教導など男性に劣らない役割があるとの立場をとる。イスラエルに対しては、西側の資本主義、東側の共産主義からなる植民地主義勢力から強力な支援を受けてきた存在と見なす。そして、アラブ・イスラームの諸人民がシオニズムとの紛争から離脱することを重大な裏切りと主張する[ Ḥamās 1988 ]([http://www.alqassam.ws/entifada\\_18/page5.htm](http://www.alqassam.ws/entifada_18/page5.htm))

2003年以降の同組織に関連する動静は以下のとおりである。

2004年3月22日、イスラエル軍がガザでアフマド・ヤーシーン師を殺害。ガザ地区の責任者にはアブドゥルアジーズ・ランティーシーが就

任。パレスチナ全体の責任者はミシュアル政治局長であると報じられた。6月2日に在外のハマース代表団とヒズブラーのナスルラー書記長が会談。9月26日にダマスカス郊外でハマース幹部のイッズディーン・シャイフ・ハリールが爆死。12月6日、PAのアッバース議長らがダマスカスを訪問した際、ハマースのミシュアル政治局長、PFLP-GCのジブリール書記長らと会談したとの情報が流れた。12月13日にもダマスカス市内でハマースの幹部の車に対する爆破事件が発生。

2005年5月22日、PLOのカドゥミー政治局長がダマスカスでハマースのミシュアル政治局長、PIJのシャッラフ指導者と会談。7月8日、PAのアッバース議長はダマスカスを訪問、ミシュアル政治局長と会談。8月18日にミシュアル政治局長とウサーマ・ハムダーンがヒズブラーのナスルラー書記長と会談。9月10日、アサド大統領が在ダマスカス・パレスチナ10派の代表と会談。10月4日、PLOのカドゥミー政治局長がダマスカスでミシュアル政治局長らパレスチナ諸組織の代表と会談。

2006年1月20日、イランのアフマディーネジャード大統領がシリアを訪問。その際、在ダマスカス・パレスチナ10派の代表と会談。1月29日、アサド大統領がハマース幹部7人と会談。2月3日、パレスチナ内外のハマース幹部がダマスカスにて会合を開きPLC(パレスチナ立法評議会)選挙後のパレスチナ政情につき協議。出席者は、ミシュアル政治局長、アブー・マルズーク副政治局長、政治局員のナッザール・リヤーン、ムハンマド・ナッザール、イマード・アル＝アラミー、ムハンマド・ナーシル、サーミー・ハーティル、アブドゥルアジーズ・ミスリ

ー、パレスチナからカイロ経由でダマスカスを訪問したムハンマド・サイード・シヤーム、ムハンマド・シャムア、ムハンマド・アウド。3月27日、パレスチナ諸組織がダマスカスで会合を開催。会合には、ハマースのミシュアル政治局長、ファタハのカドゥミー代表、PFLPのターヒル政治局員、PIJのナッハーラ代表が出席。4月22日、ハマースのミシュアル政治局長がパレスチナ諸組織がシリア・レバノンのパレスチナ難民キャンプにおける人民・広報運動計画につき合意したと発表。この活動は、パレスチナ人民とパレスチナ政府の支援を目的とする。7月12日、イランのラーリジャーニー最高安全保障評議会事務局長が、ハマースのミシュアル政治局長、PIJのシャッラフ指導者、DFLP、PFLP、PFLP-GC、PPSF、PLF、ファタハ・アル＝インティファダ、サーイカの書記長と会談。パレスチナ側は、最新パレスチナ情勢につき説明。7月28日、ナッザール政治局員は、ダマスカスを訪問した米国の黒人公民権運動指導者のジャクソン牧師が27日にミシュアル政治局長と会談したと発表。10月5日、カタルのハマド外相がミシュアル政治局長と会談。10月14日、ミシュアル政治局長はエジプトのウマル・スライマーン総合諜報長官と会談。10月29日、イランのモッタキー外相が駐シリア・イラン大使館でミシュアル政治局長、PIJのシャッラフ指導者とおのおの会談。11月27日、イザト・ラシュク政治局員が、シリアを訪問したロシアのサルタノフ副外相がミシュアル政治局長らと会談したと発表。12月5日、PAのハニーヤ首相がシリアを訪問、ミシュアル政治局長、PFLP-GCのナーギー副書記長らと会談。12月13日、パレスチナ諸組織の代表が記者会見を開催し、ハマース

スのアブー・マルズーク副政治局長，PFLP-GCのナージー副書記長らが参加して挙国一致内閣支持と早期選挙拒否を確認。

2007年1月21日，ダマスカスでPAのアッパース議長がミシュアル政治局長と共同声明を発表。声明は、「①対話の完遂で合意。②今後2週間で挙国一致内閣を組閣するよう努力する。③パレスチナ内部での戦闘停止。扇動的な報道キャンペーンの中止。④1カ月以内にPLOの再建のための計画を作る。⑤暫定的国境を持つ(パレスチナ)国家の拒否。」が内容。5月31日，ミシュアル政治局長がシリアのシャルア副大統領と会談。同日，イランのモッタキー外相がダマスカスでミシュアル政治局長，PIJのシャッラフ書記長と会談。6月5日，ハマースのウサーマ・ハムダーンがパレスチナ諸組織代表団の筆頭としてレバノンのウマル・カラーミー元首相と会談。6月15日，ミシュアル政治局長はダマスカスで記者会見し，ハマースによるガザ地区制圧を必要な措置と弁明。同局長は，PAのアッパース議長が解散を命じた挙国一致内閣の維持が重要であると述べた。6月16日夜にアル＝バッダーウィー難民キャンプでファタハとハマースの構成員の乱闘事件が発生。6月24日，イランのバクリー外務次官がダマスカスでミシュアル政治局長，PFLPのターヒル政治局員，DFLPのハワーティマ書記長，PFLP-GCのジブリーール書記長，PLOのザキー駐レバノン代表(アッパース議長特使)と会談。7月19日，イランのアフマディーネジャード大統領がダマスカスでPIJのシャッラフ書記長，ハマースのミシュアル政治局長と個別に会談。両組織にPFLPのターヒル政治局員，PFLP-GCのジブリーール書記長，DFLPのハワーティマ書記長等その他組

織を加えた拡大会合を開催。7月26日，ミシュアル政治局長はロシアのラブロフ外相と電話会談し，パレスチナが危機から脱する方法につき協議。8月9日，ミシュアル政治局長はイエメンを訪問。9月15日，シリアを訪問したスーダンのイスマール特使とハマース関係者が会談した。会談では，シリア・イラク国境で立ち往生しているパレスチナ人の受け入れ問題，ハマースとファタハの仲介問題が議題となった。9月16日，「パレスチナ諸派同盟」が開催したサブラ・シャーターラーの虐殺25周年記念集会にウサーマ・ハムダーンが出席。10月4日，サイダ南東のミーヤ・ミーヤキャンプでファタハとハマースの構成員が交戦。10月29日，シリアを訪問したイランのモッタキー外相は，PIJのシャッラフ指導者一行，ハマースのアブー・マルズーク副政治局長一行，在シリア・パレスチナ諸派指導者一行とおのの会談した。会談ではパレスチナの諸問題，米国が主催する予定の和平会議が議題となり，パレスチナ側はイランに対し支援の継続，イラン側はパレスチナに対し問題を内部で解決することを求めた。11月12日，ムアッリム外相はミシュアル政治局長らハマースの政治局員と会談し，パレスチナ情勢につき協議した。11月26日，ムアッリム外相はミシュアル政治局長と会談し，アナポリス会合にシリアの代表が出席することについて説明した。12月8日，ミシュアル政治局長一行はサウジを訪問した。

2008年1月4日，ハマースはダマスカスのハイファー・ホールで結成20周年記念演説会を開催。ミシュアル政治局長，シリア・バアス党のアフマド・ハサン民族指導部員，PIJのシャッラフ指導者，PFLP-GCのナージー副書記長らが演

説した。1月6日、ミシュアル政治局長はシリアを訪問したイランのラーリジャーニー指導者名代と会談した。1月7日、ハマースはバッダウィー難民キャンプに設置した社会事業用物資の倉庫が放火されたと発表した。この倉庫を通じ、ナフル・アル＝バーリド難民キャンプの住民向けの食糧・薬品供与が行われていた。1月23日～25日、ダマスカスでパレスチナ愛国会議が開催された。会議には、ハマースのミシュアル政治局長、活動家(所属不明)のバッサム・シャクア、PFLP-GCのジブリール書記長、ナージー副書記長、PIJのシャッラフ指導者、バアス党民族指導部のサーミー・アッターリー、PNF中央指導部のユースフ・ファイサル、バアス党地域指導部のバッサム・ジャーニビーヤ、ピラール情報相、シャアバーン移民相、PLA(パレスチナ解放軍)のハドラー参謀長、ヒズブッラー幹部のイブラーヒーム・アミン・サイード、ファタハ・アル＝インティファダのアブー・ムーサー書記長、パレスチナ人民支援のためのイラン委員会の委員長、PPSF、PLF、共産党革命派の代表が出席した。2月15日、イランのモッタキー外相はダマスカスでハマースのミシュアル政治局長、PIJのシャッラフ指導者とおのおの会談した。3月18日、アブー・マルズーク副政治局長一行はイエメンを訪問した。4月1日、ダマスカス南郊のヤルムーク、パレスチナ両キャンプでハマース、PIJ、PFLP-GC、PFLPなどの諸派の呼びかけによる「土地の日」(3月30日)のデモが行われた。4月18日、ミシュアル政治局長はダマスカスで米国のカーター元大統領と会談し、イスラエルによる封鎖、パレスチナ人囚人の問題につき協議した。

・ウスバト・アル＝アンサール  
‘Uṣba al-Anṣār

1985年または1986年にファタハの活動家ヒシャーム・シャリーディーが結成。アイン・アル＝フルワ難民キャンプに在住し、構成員は数百人と推定される。1991年12月に同人が暗殺された後はアフマド・アブドゥルカリーム・サアディー(通称アブー・ムフジン)が指導者となるが、サアディーは1995年のナッザール・ハラビー暗殺事件(注1)以後消息不明となっている。サアディーが消息不明となつてからは、ワフィーク・アクル(通称アブー・シャリーフ)、ムハンマド・ムスタファー(通称アブー・ウバイダ)、ハイサム・サアディー(通称アブー・ターリク)、ターハー・シャリーディーが組織を指導する。

ウスバト・アル＝アンサールは、イスラームを人類全体の諸問題の唯一の正しい解決と考え、宗教・信条としてだけでなく、政治・社会制度としてもイスラームを施行しようとする。また、すべての暴君とイスラームに敵対する者を不信仰者(カーフィル, kāfir)と断罪し、世俗主義、民主主義、社会主義、民族主義、国民主義も不信仰(タクフィール, takfir)行為と見なす。一方、他のイスラーム組織には、党派心を捨てるよう勧告する(<http://www.alnusra.net/vb/showthread.php?t=238> 2007年5月29日閲覧)。

2003年以降のウスバト・アル＝アンサールに関連する動向は以下のとおり。

2005年10月にアイン・アル＝フルワ難民キャンプの隣接地でレバノン人と交戦。

2007年5月13日、アイン・アル＝フルワ難民キャンプでターハー・シャリーディーに対する銃撃事件が発生。6月5日、アイン・アル＝フル



ワ難民キャンプでパレスチナ諸組織が結成した衝突防止部隊に参加。6月11日に幹部で広報担当とされるワフィーク・アクル(通称アブー・シャリーフ)名義の音声声明が流布。レバノン国軍を敵と見なすか否かで意見の一致がみられない現状での最優先事項はナフル・アル＝バーリド難民キャンプでの流血の防止と、一致して西洋・ユダヤの敵に当たることであると表明。6月27日、アブー・アイナイン等ファタハの代表団がウスバト・アル＝アンサール幹部のハイサム・サアディー(通称アブー・ターリク)宅を訪問。7月1日、パレスチナ筋はジュンド・アッ＝シャームが解散し、同派の構成員(30～40人)がウスバト・アル＝アンサールに参加することになったと述べた。

・ウスバト・アン＝ヌール

‘Uṣba al-Nūr

ウスバト・アル＝アンサールから分裂(分裂年は不明)。基本政策、構成員数は不明。指導者はアブドッラー・シャリーディー。同人は、ウスバト・アル＝アンサールの創設者ヒシャーム・シャリーディーの息子。

・ジュンド・アッ＝シャーム

Jund al-Shām

2001年ごろ発足<sup>(注2)</sup>。アイン・アル＝フルワ難民キャンプに在住し、2007年7月2日付『シャルク・アウサト』紙によると構成員は30～40人[al-Gharbī 2007b]

2007年5月25日付『シャルク・アウサト』紙は、同組織がアブー・ムサブ・ザルカーウィーが率いた国際的組織の一部であるとの説を報じている[Ibrāhīm 2007]。また、2005年6月12

日付『アッ＝サウラ』紙は、シリアで摘発された「テロ組織」として「宣教とジハードのためのジュンド・アッ＝シャーム」という名称の組織について報じた[al-Thawra 2005]。ただし、いずれの事例もアイン・アル＝フルワ難民キャンプに在住するジュンド・アッ＝シャームと同一と考えるべき根拠は乏しい。

指導者はウサーマ・シハービー(創設者の一人、後に離脱)、イマード・ヤーシーン、ガーンディー・サウムラーニー、シャハーダ・ジャウハル。

タクフィール主義をとる。アラブ、イスラーム世界の諸体制をイスラームに基づく統治を行わない不信仰・背教体制であると見なし、カリフ国家を樹立するため、既存の体制をすべて武力で変革しようとする。

2003年以降の同組織に関連する動静は以下のとおりである。

2005年9月12日、アイン・アル＝フルワ難民キャンプの隣接地でナセル人民機構支持者と交戦。10月23日、レバノン人と交戦。

2007年5月6日、アイン・アル＝フルワ難民キャンプでファタハの要員と交戦。6月2日、同キャンプでレバノン国軍と交戦。6月18日のアイン・アル＝フルワ難民キャンプ隣接地での爆発で、シャハーダ・ジャウハルが負傷。7月1日、パレスチナ筋は、ジュンド・アッ＝シャームが解散し、同派の構成員がウスバト・アル＝アンサールに参加することになったと述べた。

2008年3月21日、アイン・フルワ難民キャンプでファタハと「ジュンド・アッ＝シャーム」が交戦。

### ・ファタハ・アル=イスラーム

Faḥ al-Islām

2006年11月に、レバノンのナフル・アル=バーリド難民キャンプなどでファタハ・アル=インティファダから分裂。構成員数は、発足当初は200人程度とみられたが、レバノン国軍との戦闘が勃発した2007年5月には約500人に拡大したとの推測も出た。指導者はシャーキル・アル=アブスィー(指揮官。通称アブー・フセイン)。

ファタハ、ファタハ・アル=インティファダの腐敗を非難し、パレスチナ解放の指針としてイスラームに立ち返ることを標榜している(設立声明 <http://www.al-hesbah.org/v/showthread.php?t=98214> 2006年11月28日閲覧)。また、アル=アブスィー指揮官は2007年1月6日付『アル=ハヤート』紙とのインタビューで、レバノンのパレスチナ難民キャンプに勢力を拡大し、キャンプでの生活を改革することを当座の目標とする趣旨の発言をしている[al-Ayyubi 2007]

2003年以降の同組織に関連する動静は以下のとおりである。

2007年5月10日、イラクへの越境を図ったアブー・ライス・シャーミーとアブー・アブドゥッラフマーン・シャーミーが「シリアの暴君の警備隊」と交戦、同胞2人とともに殉教したとする声明を発表。5月20日、ナフル・アル=バーリド難民キャンプ、トリポリー帯でレバノン国軍と交戦。6月24日、ナフル・アル=バーリド難民キャンプでファタハとファタハ・アル=イスラームの要員が交戦。6月28日、レバノン国軍はトリポリ近郊のカラムーン地区で殺害した5人と逮捕した2人について、ファタハ・アル=イスラームの者であると発表。8月7日、イン

ターネット上に幹部のアブー・フライラが殉教したとの声明が流布。レバノンの閣議は、6日にトリポリで同人を殺害したと発表。9月3日、レバノン国軍はシャーキル・アル=アブスィーの死亡を確認したと発表。9月10日、レバノン当局は、DNA鑑定でアル=アブスィーの遺体が本人のものではないと発表。10月1日、レバノン軍はバグダーウィーキャンプのパレスチナ諸派の合同委員会とともにファタハ・アル=イスラーム幹部のナースィル・イスマーイーールを逮捕したと発表した。同人は、ファタハ・アル=イスラームのシューラー評議会議員。

2008年1月4日、『アル=ハヤート』紙はペイルート事務所に「ファタハ・アル=イスラーム」名義で12月31日にアイン・アル=フルワで複数の爆破を行ったと主張するFAXが送り付けられたと報じた。1月7日、インターネット上でシャーキル・アル=アブスィーのものとする音声声明(57分57秒)が流布。ナフル・バーリドの戦いについて、始まりにすぎないと論評。

### ・ムジャーヒダ・イスラーム運動

al-Ḥaraka al-Islāmiya al-Mujāhida

発足した年代・経緯は不明。基本政策、構成員・戦闘員数は不明。2007年6月6日付『シャルク・アウサト』紙は、指導者のジャマール・ハッターブを難民キャンプのイスラーム諸派から尊敬を集める説教師であると報じている[al-Gharbī 2007a]

2007年6月5日、アイン・アル=フルワ難民キャンプでパレスチナ諸組織が結成した衝突防止部隊に参加した。

#### IV 諸組織の相関と政治同盟の現況

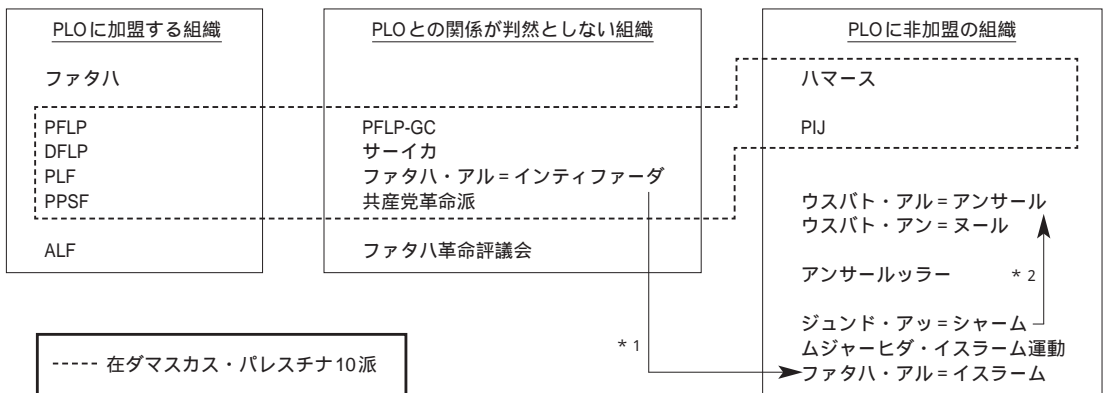
シリア・レバノンにおけるパレスチナ諸組織間の関係は、パレスチナ本土における「PLO加盟組織と非加盟組織」という関係軸に、「在ダマスカス・パレスチナ10派」という政治同盟と、「レバノンの難民キャンプに在住するイスラーム主義を標榜する組織」という、シリア・レバノンに固有の関係が重なっている点が特徴的である。各組織の政治同盟への加盟状況などについては図2を参照。

本研究資料で取り上げた組織のうち、PLOに加盟している組織はファタハ、PFLP、DFLP、PLF、PPSF、AFLである。ただし、PLOとシリアとは1980年代に関係が険悪化し、現在に至るまでシリア国内でPLOの公式な活動を行うことができない。このため、シリアにおけるPLOの公式な活動は、アッバース議長、ファールー

ク・カドゥーミー政治局長、ザキー駐レバノン代表らの幹部が度々シリアを訪問し、シリア政府やシリア在住のパレスチナ組織と接触する活動に限られる。一方、レバノンにおいてはザキー駐レバノン代表が常駐し、レバノン政府との接触やレバノン国内の難民キャンプの諸組織との調整を行っている。しかし、ザキー駐レバノン代表がファタハの幹部であることに象徴されるように、PLOの活動は専らファタハによって代表されている。このため、シリア・レバノンではファタハ以外の組織の活動がPLOの枠内での活動と見なされることはほとんどない。

在ダマスカス・パレスチナ10派とは、PFLP、DFLP、PFLP-GC、ファタハ・アル=インティファダ、サーイカ、PPSF、PLF、共産党革命派、ハマース、PIJの10組織のことである。発足当初はオスロ合意に基づくイスラエルとの和平プロセスに反対するための政治同盟であったが、2006年に実施されたPLCの選挙にPFLP、

図2 シリア・レバノンのパレスチナ諸組織の相関



(注) \*1 2006年11月、ファタハ・アル=イスラームがファタハ・アル=インティファダから分裂。

\*2 2007年6月、ジュンド・アッ=シャームが解散し、構成員の大半がウスバト・アル=アンサールに合流。

(出所)筆者作成。

DFLP, ハマースのような有力組織が参加しており, 和平プロセスやそれに基づくパレスチナ自治に反対する同盟としては形骸化している。にもかかわらず, 在ダマスカス・パレスチナ10派は現在もシリア, イラン等と接触したり, 共同声明を発表したりする活動を続けている。これは, パレスチナ諸組織にとってはパレスチナ間の大同団結を, シリアやイランにとっては, より広範なパレスチナ支援を象徴する舞台として在ダマスカス・パレスチナ10派の枠組みが有用と見なされるからと思われる。また, 在ダマスカス・パレスチナ10派の枠内でパレスチナ諸組織が意思疎通し, 政治的立場を調整することは, 特定の組織の独走を牽制するという性質を帯びていることも見逃すことはできない。10組織のなかにはPLOに加盟する組織と加盟していない組織が含まれるが, PFLP-GC, サーチカ, ファタハ・アル=インティファダ, 共産党革命派はその時々状況に応じてPLO加盟組織としての発言権を要求したり, PLOからは離脱・関係を凍結したと称してPLOをまったく意に介さない立場を表明したりするなど, PLOとの関係が判然としない。

レバノンの難民キャンプ在住イスラーム組織としては, アンサールッラー, ウスパト・アル=アンサール, ウスパト・アン=ヌール, ジュンド・アッ=シャーム, ファタハ・アル=イスラーム, ムジャーヒダ・イスラーム運動が挙げられる。これらの組織には, PLOに加盟していない, レバノンのパレスチナ難民キャンプ以外の場所に活動拠点を持たないという特徴がある。ただし, レバノン国軍と交戦したファタハ・アル=イスラームを除く諸組織は, 難民キャンプの治安維持などについて他のパレスチナ

組織やレバノン政府と協力関係にある。

なお, ファタハ革命評議会については, 同組織が近年目立った活動をしていないこともあり諸般の政治同盟との関係が判然としない。

## おわりに

以上で解説したとおり, シリア・レバノンにはさまざまなパレスチナ組織が存在し, 時宜に応じて個別, あるいは政治同盟単位でさまざまな活動を行っている。こうした活動は, シリア, レバノン, 場合によってはイランのような国家の政策や, アル=カーイダに同調する活動家の浸透といった文脈で解釈されることがあり, シリア・レバノンのパレスチナ諸組織や, 両国に在住するパレスチナ人の主体性や利害関係が顧みられないまま時事解説がなされることすらあるように思われる。シリア・レバノンのパレスチナ諸組織が, さまざまな外部の勢力からの関与・干渉に翻弄されてきたことは否定できないが, 諸組織そのものや, 諸組織の存在意義を無視してよいということではない。

シリア・レバノン在住のパレスチナ難民は, 現在のパレスチナ問題解決努力と称する営みのなかでほとんど関心を払われていない。だからこそ, シリア・レバノン在住のパレスチナ人はなんらかの組織を形成し, シリア・レバノンの生活を支えたり, 対外的に自分たちの利害を主張したりする必要に迫られているのである。パレスチナ難民が存在する限り彼らが在住先で組織を作ったり, 自己主張をしたりする必要性はなくなる。そして, 内政・外交的に困難な状況におかれているシリア・レバノンでは, 今後もパレスチナ組織の動向が内外の注目を集

めたり、情勢推移のなかで重要な意味を持ったりすることが予想される。筆者としては、このような状況にあるが故にシリア・レバノンのパレスチナ諸組織に焦点を当てた観察・分析が今後も欠かせないと考える。

(注1) 1995年にベイルートでイスラーム組織「慈善事業協会 (Jama'iya al-Mashā'ir al-Khayriya)」（通称アフバーシュ “al-Ahbāsh”）の会長だったナッザール・ハラビーが暗殺され、これがウスバト・アル＝アンサールの犯行であるとされた事件。

(注2) ただし、『中東研究』487号：135は、2004年6月29日にアイン・アル＝フルワ難民キャンプでアル＝カーイダ“系”組織「ジュンド・アッ＝シャーム」が結成されたとする報道がレバノンで流布したと記している。

## 【文献リスト】

### 日本語文献

青山弘之・末近浩太著(青山弘之編)2007.『現代レヴァント諸国の政治構造とその相関関係』調査研究報告書 アジア経済研究所。

『中東研究』2004. 483号 “シリア” 173-183, “レバノン” 184-190。

2005. 487号 “パレスチナ” 95-118, “シリア” 123-133, “レバノン” 134-139。

2006. 491号 “パレスチナ” 144-162, “シリア” 169-180, “レバノン” 181-194。

2007. 495号 “シリア” 122-127, “パレスチナ” 139-152, “レバノン” 161-179。

### 外国語文献

al-Ayyubī Ṣalāḥ 2007. “Awwal Ḥadīth la hu ba'ada l'ulan Inshiqāq 'an <<Fath al-Intifāda>>,” *al-Hayāt*, January 6.

Badwān 'Alī 1999. “al-Yasār al-Filistīnī al-Musallah,” *al-Ahālī li al-Ṭībā'a wa al-Nashr wa al-Tawzī'u*

Damascus.

al-Gharbī Khālid 2007a. “Quwwat al-Faṣl al-Filistīnī Taḍamm <<‘Uṣbat al-Anṣār>> wa <<Anṣr Allah>> wa <<al-Ḥaraka al-Islāmīya al-Mujāhida>>,” *al-Sharq al-Awsaṭ*, June 6.

2007b. “Majmū'at <<Jund al-Shām>> al-Filistīniya Tu'ulin Hall Nafshā wa Inḍimām Mu'ḍam 'Anāṣirhā ilā <<‘Uṣbat al-Anṣār>>,” *al-Sharq al-Awsaṭ*, July 2.

Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmīya[ Ḥamās ]1988. “Misāq Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmīya[ Ḥamās ]” Aug. 18.

*al-Hayāt* 2007. “Fi Ḥadīth ilā <<al-Hayāt>> Maṭl' 2007... Shākir 'Absī : Ji'unā ilā Lubnān ba'da 1559 wa lā 'Alāqa lanā bi <<al-Qā'ida>>,” May 24.

al-Ḥizb al-Shuyū'i al-Filistīnī-al-Thawrī 1998. “al-Mashrū' al-Ṣahayūnī bayna al-Ṭabī'a al-Isti'umārīya al-Istiṭāniya ...wa Awhām,” *al-Hall al-Wasaṭ*.

Ibrāhīm Dāwd 2007. “Tanẓīm <<Jund al-Shām>> Bada'a ma'a al-Zarqāwī fi Afghānistān wa Intakala bi Za'āmat <<Abu Yūsuf>> ilā Mukhayyam 'Ayn al-Ḥilwa,” *al-Sharq al-Awsaṭ*, May 25.

Sa'adī Sa'ad 1998. “Mu'jam al-Sharq al-Awsaṭ,” *Dār al-Jil Beirut*.

*al-Thawra* 2005. “al-Irhābiyūn al-Takfīriyūn fi Dā'irat Ukhrā li al-Qatl wa al-Ijram wa al-Takhrīb...,” June 12.

### インターネットサイト

DFLPホームページ：

<http://www.dflp-palestine.org/index.htm>

DFLP機関誌『フッリーヤ』(週刊)：

<http://www.alhourriah.org/>

PFLPのホームページ： <http://www.pflp.ps/>

PFLP-GCのホームページ：

<http://www.palestinesons.com/>

PIJのホームページ： <http://www.qudsway.com/>

PIJの機関誌『ジハード』(月刊)：

<http://www.alnashrah.org/>

ハマース系ニュースサイト「パレスチナ情報センター」：

<http://www.palestine-info.info/ar/>

(たかおか ゆたか / 中東調査会研究員)